View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

『地域共創学会誌』，vol. 2，23-34，2019
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *Journal of Collaborative Regional Development* vol. 2, 23-34, 2019

【事例報告】

フリースクールにおける演劇ワークショップの実践と検証

古　賀　弥　生

要　約

福岡市の公共施設である「なみきスクエア」が主催した，フリースクールにおける演劇ワークショップの実践活動とその成果検証結果について報告する。１回90分，10回にわたる演劇ワークショップを経験した中学生たちの中には，当初の無表情でほとんど声を発しない状況から笑顔を見せるように変化し，互いのよい点を認め関わり合うような変容を見せる例があった。しかし1か月後に確認したところ，日常生活にその変化が及んだとはいえなかった。取り組みを長期に継続することでさらなる変化を期待できる可能性を主催者，フリースクールのスタッフらは感じており，初年度の活動としては，このこと自体をひとつの「成果」と見ることもできる。社会包摂につながる芸術文化体験をどのように評価するのか，芸術が社会にもたらす力をどのように捉えるのか等，課題を意識しつつも活動を継続することの重要性が指摘される。

Keyword：フリースクール，演劇ワークショップ，社会包摂，成果検証

１．はじめに

近年，各地で演劇ワークショップが盛んに開催されるようになっている。その内容は，プロの演劇人による創作手法の一部を体験することで演劇に関する理解を深めるもの，学校等教育現場においてコミュニケーション能力や協調性などを伸ばすことを目的にしたもの，その延長線上で企業の研修等に取り入れられるものなど，実に多様である。また，演劇の上演に向けた長期にわたる活動からごく短期間，場合によっては１回限りの活動まで，実施の態様もさまざまに展開されている。

演劇ワークショップの隆盛は，その教育的側面に注目が集まっていることが背景にある。演劇活動や演劇ワークショップの教育的側面については，先行研究で共感性を向上させる，他者の視点に立てるようにする，感情の調整を促すなどの効果が確認されている[1]。しかしながら，このような成果の検証は一定の条件下にある「実験室」のような場で行うことは難しく，個別具体の現場に即した研究にならざるをえない。したがって，より多くの実践活動とその記録，検証結果の蓄積を得ることが重要であると考えられる。

本稿はその一端を担うことを目指し，福岡市の公共施設である「なみきスクエア」からの平成30年度受託研究として行った，フリースクールにおける演劇ワークショップの実践活動とその成果検証結果について報告するものである。

---

[1] OECD 教育研究革新センター編（2016）p267。

なお，本稿では主に上演を目的とした一連の活動の場合を「演劇活動」，小規模なシーン創作等は含まれても必ずしも上演を目的としない活動の場合を「演劇ワークショップ」と記載する。

2．フリースクール等における演劇ワークショップ先行事例

2.1．フリースクールとは

本稿はさまざまな場で展開されている演劇ワークショップのなかでも，フリースクールという環境で実施された事例を取り上げる。フリースクールとは，「従来の学校教育の枠にとらわれず，子供の自由と自主性の尊重を原則とする学びの場」であり，日本では，既存の学校教育とは異なる教育を目指して設立したものと，深刻化する不登校に対応するために設立されたものとの 2 つの流れがある[2]。

不登校の児童生徒は増加傾向にあり， 平成 29 年度の調査結果では小学校で 185 人に 1 人，中学校では31 人に 1 人の割合で長期欠席者がいるとされている[3]。また，不登校の要因・背景は様々であり，一層多様化・複雑化しているという指摘もある[4]。

フリースクールは，不登校児童生徒に対応する場として各地でNPO等により運営されている。以下，このようなフリースクールにおいて，演劇活動や演劇ワークショップが実施されている先行活動について事例を挙げる。

2.2．「東京シューレ」における演劇活動[5]

「東京シューレ」は昭和60年，不登校の子どもが急増した社会情勢から，学校以外の場の必要性を痛感した現NPO法人東京シューレの奥地圭子理事長が教職を辞して開設した。子どもが安心できる居場所づくりや，興味・関心を伸ばす学びの場づくりの一環として演劇活動にも取り組んでいる。開設年に初めての夏合宿を行った場所が演劇人の拠点であったことから演劇の活動が始まり，長期にわたる歩みのなかで，子どもたちがシナリオを書いて上演活動を行う，映画を撮影するなどの活動に進展した。演劇活動がもたらすものについて奥地は「そうだ，これだったという自己存在の確認，やり切った自信と達成感」「観客の拍手や感想は（中略）喜びや安堵感をもたらし，解放感，満ち足りた気持ち」をもたらし，不登校の子どもの多くが感

---

[2] ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典による。

[3] 文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」による。同調査における「不登校」は，連続又は断続し年間 30 日以上欠席し，何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況（ただし，病気や経済的な理由によるものを除く）と定義されている。

[4] フリースクール等に関する検討会議「不登校児童生徒による学校以外の場での学習等に対する支援の充実～個々の児童生徒の状況に応じた環境づくり～報告」（平成 29 年 2 月 13 日）p 4。

[5] 日本演劇教育連盟編（2019）p 4 ～ 7 参照。

じている自分自身への否定的な感覚が解消されるほど大きな経験になる場合がある，と述べている。

2.3．日本劇団協議会による「やってみようプロジェクト」[6]

「東京シューレ」はフリースクールにおける諸活動の中に演劇が取り入れられた例であるが，一方，演劇の力を社会課題の解決に役立てようとする，近年の芸術文化をめぐる社会の流れに呼応した演劇関係者の側からの動きとしては，公益社団法人日本劇団協議会が実施している「やってみようプロジェクト」が挙げられる。「演劇のもつ創造のパワーを社会課題解決に役立てるコミュニケーションワークショップ」として児童館，児童養護施設，高齢者施設，青少年自立支援施設，特別支援学校等でのワークショップを実施，さらにその成果検証にも取り組んでいる。活動の場にはフリースクールも含まれており，演劇ワークショップの社会包摂機能について言語化することを目的に調査報告書も公開されている（詳細は第 3 章参照）。

3．先行研究にみる演劇活動，演劇ワークショップの意義

他の芸術分野に関わる活動と同様，演劇の手法による社会的な取り組みも，特にここ数年はその成果を可視化し，可能な限り数値化しようとする努力が顕著に行われるようになっている。本章ではその先行研究をいくつか挙げる。

まず，芸術教育が子どもの発達にどのようなインパクトをもたらすのか，というテーマに関する研究を網羅し検討したOECD教育研究革新センターからは，「演劇指導は，子供や青少年が自分の感情を調整し，より望ましい自己概念を発達させ，その痛みを感じることで他者に共感し，他者の視点から物事を考えることを促す可能性を持っている」[7]と発信されており，「芸術教育がある形態の社会的行動／社会的理解を高める点を証明しているのは，今のところ演劇分野のみである」[8]とも述べて，演劇による社会的スキルの獲得について高い評価を与えている。

また，日本の学校教育関係者による学校での演劇教育については，さまざまな実践活動の事例とその振り返りから演劇が子どもにもたらすものをまとめた調査事例が日本演劇学会の「演劇と教育研究会」で蓄積されているほか，実践者による文献もいくつか挙げられる[9]。

特に社会包摂的な文脈での演劇ワークショップの活用については，近年さまざまな取り組みと成果検証の試みが見られる。このような実践と検証に関する先行事例としては，第2章でも

---

[6] 公益社団法人日本劇団協議会サイト。
http://www.gekidankyo.or.jp/news/news_071.html 参照（平成 31 年 2 月 18 日確認）
[7] OECD 教育研究革新センター編（2016），p281。
[8] 同上，p267。
[9] 一例として，佐藤信編（2011）。

触れた日本劇団協議会が文化庁からの委託を受け平成28（2016）年度にまとめた「芸術団体における社会包摂活動の調査研究報告書」，平成29（2017）年度「演劇による社会的包摂プロジェクト調査研究報告書」が参考になる[10]。

「芸術団体における社会包摂活動の調査研究報告書」では日本劇団協議会正会員団体と文化庁の「劇場・音楽堂等活性化事業」に採択された団体を中心に，「社会包摂機能がある実践をしているか」を尋ねるアンケート調査を実施し，顕著な効果があったものや，実験的な性質を有しているもの5例を，プロジェクトチームで選別して調査対象としている。さらにそのなかの1団体を対象に社会的インパクト評価の一種であるSROI（Social Return on Investment: 社会的投資収益率。社会的インパクトを貨幣価値換算することを意図したもの）の手法での評価も行っている。この調査では，5つの事例から演劇への参加（出演，制作参加）による社会的包摂に関わるインパクトについてエンパワーメント，自己効力感の向上，コミュニティ醸成の3点を抽出している[11]。特に岐阜県可児市の東濃高校での事例では（授業2コマ分110分×3回を1年次10，11月に実施），測定可能なアウトカムである「問題行動の減少」及び「中退者数の減少」をインパクトとしたところ，演劇表現ワークショップにおけるインプットに対するインパクトを貨幣価値換算したSROIの値は，「9.86」となり，投入した貨幣価値の9.86倍のインパクトがあったとされワークショップの有効性が示された，としている[12]。

「演劇による社会的包摂プロジェクト調査研究報告書」の調査対象は，高齢者施設，児童養護施設などの社会包摂の現場で実施された，演劇的手法を活用したプログラム10件であり，SROIの手法での評価を試みている。上述の東濃高校ではSROI値を用いた2年目の検証で，「（高校）卒業」というアウトカム指標が加わり，SROI値「16.7」（投入した貨幣価値の16.7倍に及ぶインパクトがある）と算出されている[13]。

ただし，SROIの手法による評価は，上記報告書でも述べられているように，定量化され，わかりやすいものの，複雑かつ柔軟な側面を持つ芸術を活用した事業には必ずしも適さない場合があることに注意が必要である。上記2件の報告書でも活動内容やそこで起こったことが記録され，参加者や関係者のアンケート等も交えた多角的な分析が試みられている。

本稿は，あるフリースクールにおいて実施された演劇ワークショップがもたらしたものを検証し，記録することを目的とするものである。本稿で明らかにされることは，その現場で起こったことであり個別具体の事例であることから，そこからなんらかの普遍化を行うことは難

---

[10] 両報告書とも公益社団法人日本劇団協議会のサイトからダウンロードが可能。
http://www.gekidankyo.or.jp/book/（平成31年2月18日確認）
[11] 2016報告書p27～28参照。
[12] 2016報告書p51参照。
[13] 2017報告書p86参照。

しい側面がある。先行研究についても事情は同様で，多様な対象者，異なる環境下で行われる諸活動からもたらされるエピソードがあるなか，成果検証をどのように行うのか，いまだ模索されているのが実態である。それだけにより多くの事例を積み上げたうえで理論化を行うことが必要であり，本稿もそこに貢献することに目的がある。

以下，本研究での実践活動と成果検証について述べる。

4．実践の記録

4.1．実施の経緯

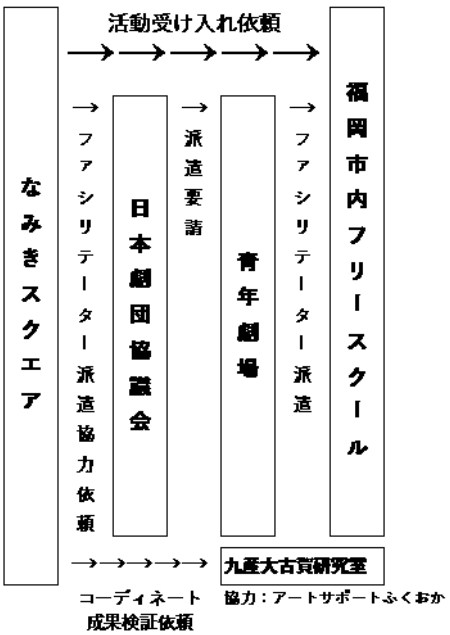
この活動は公立文化施設としての機能を持つ「なみきスクエア」（平成28年開館。福岡市東区千早4丁目21番45号）が文化芸術の力を社会包摂に生かす試みとして演劇の手法による活動を提案し，それに賛同した福岡市内フリースクール（以下，スクール）の協力を得て実施したものである。

なみきスクエアは，設置者（福岡市）と指定管理者（なみきスクエアみらいネットワーク：代表者・株式会社JTB）双方の担当者が社会包摂型劇場経営で知られる可児市文化創造センターala（岐阜県）のアーツマーケティング・ゼミ「あーとま塾」に参加し，社会包摂の視点から同館を運営するという考え方を掲げるようになった。平成29年度までにも福岡市東部療育センターでのダンスワークショップなどの活動を展開しており，30年度はフリースクールにおける演劇の活動を企画し実施するに至った。これらの活動はなみきスクエアの館外で実施されているが，同館の自主事業として位置づけられている。

実施にあたっては，なみきスクエアが若者の自立支援施設などで社会包摂的な演劇ワークショップを実施してきた公益社団法人日本劇団協議会に協力を要請し，加盟団体「秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場」（以下，青年劇場）から板倉哲・八代名菜子の両氏がファシリテーターとして派遣された。また，受け入れ先については，対象となったスクールになみきスクエアから働きかけを行い，活動の対象者はスクールに通う中学生となった。さらに，活動に関わるコーディネートと成果検証について，九州産業大学地域共創学部地域づくり学科・古賀研究室とNPOアートサポートふくおかに協力が要請され，九州産業大学の受託研究として取り組まれることとなった。

上記のような動きは30年度当初から進められており，同年8月9日には関係者がスクールに集まって初めての打ち合わせが行われ，実施日程や内容に関する具体的な協議が行われるに至った。

図１　福岡市内フリースクールでの演劇ワークショップ関係者について



4.2. 実施の概要

本実践の概要は以下のとおりである。

①活動場所　　福岡市内フリースクール

②活動期間　　平成30年10～11月　10回

③対象者　　スクールに通う中学生10名。参加者数は延べ56人，毎回5，6人程度が参加。スクールに毎日来ている子ばかりではなく，登校しても必ず朝から夕方まで過ごすわけではない。一人ひとりの状況に応じて，授業も原則として個別指導で行われている。演劇ワークショップも無欠席の子もいれば１回だけの参加であった子もいた。

ファシリテーター　青年劇場　板倉 哲・八代 名菜子

④活動目的　　初回の活動後，ファシリテーター，スクールスタッフ，コーディネーター，主催者を交えて活動の到達点について話し合った結果を検証者（筆者。コーディネーターを兼ねる）が以下のようにまとめた。

なお，スクールではこの活動を「自己表現ワークショップ」と位置付けている。

＜活動目的＞

ｉ 子どもたち一人ひとりの変化について

・コミュニケーションに関する変化をもたらす

・自信を持つ

・プラスの感情を持つ

ⅱ 子ども同士の関係性や教室の雰囲気の変化について

・自己と他者の差異を認め，それぞれの良さに気付く

・教室内での食事やお茶の時間が「団らん」になる

ⅲ 先生方にとって

・子どもたちから何かを引き出すやり方を演劇人から学ぶ

ⅳ 関係者全体にとって

・活動を継続したいと思う

⑤活動内容　ワークショップは全部で10回，1回あたり90分程度。

10回に及ぶ活動は，毎回さまざまなゲームを中心としたワークで構成されていた。一緒にいる仲間に届く声で発信することや「やりたい」「いやだ」といった自分の思いを表現することができる関係作りから，後半はグループでの身体表現，簡単な場面の創作まで進んでいった。

なお，プログラム案は毎回事前にファシリテーターから提示され，スクール内で検討のうえ実施案が決定された。ただし当日の様子で修正されることもあった。コーディネーターはそのプロセスを調整し，必要に応じてプログラム内容に意見を述べた。

5．成果の検証

5.1．検証の手法

成果検証にあたっては，まず，活動を始める時点で定めた活動目的（第4章参照）を到達目標とした。この活動目的を定めた背景となる，活動開始前の子どもたちの状況は以下のとおりであった。

【活動前の子どもたちの様子】

・声が小さい，あるいは相手との距離に応じた制御ができない。

・表情が乏しい。

・「楽しい」などの感情・感覚がわからない。

・求められる役割を果たそうとがんばりすぎる。

・子ども同士は一緒に過ごしてはいるが，名前も知らないかもしれない　→　関係性が薄い

＊このような点で気になる子どもがいる，ということであり，必ずしもすべての子どもにあてはまる様子ではない。

活動目的のうち，ⅰとⅱは子どもたちの変化を期待したものであるが，ⅲとⅳは活動に携わ

る大人に関するものであるため，以下は特に子どもたちの変化に関わるⅰとⅱに特化して活動の成果を見ていく。

検証にあたっては以下のような流れで行った。

①ワークショップ中の様子から見えた変化について

毎回の活動記録を作成した。記録作成にあたっては，筆者のほか，子どもを対象とした芸術体験ワークショップのコーディネート業務の経験を有する記録補助者 1 名が活動に立ち合い，状況を逐次筆記した。2 人のメモを突き合わせたうえでファシリテーター 2 名の確認を経て記録として確定させた。

この活動記録から「子ども（個人）の変化」「子ども同士の関係性の変化」というテーマに沿ったエピソードの抽出を行い，ファシリテーターやスクールスタッフのコメントによってエピソードを裏付けたうえで，さらにエピソードからストーリーを描出した。

②実施後の日常生活への影響について

ワークショップ中に見られた変化が子どもたちの日常にも影響しているのか，という点については，活動に立ち会うだけでは知ることができない。そこで，10 回にわたるワークショップが終了した約 1 か月後に，スクールスタッフ 4 名へのグループインタビューを行い，参加した子どもたちの教室での様子などを確認した。

なお，活動の成果を考える際，最も大切なのは言うまでもなく対象の子どもたちにとってどうだったのかという点である。本来ならば参加者本人へのヒアリングなどによってこの点を明らかにすべきだが，思いを言葉にするのが苦手な子，他者に過剰なまでの気遣いをする子もいる。じっくり考えて提出できる感想文も寄せてもらったが，そこに書かれたことがどこまで本当の思いを表現しているのか，判断が難しい。そこで，観察を通じた活動記録，最も身近な大人であるスクールスタッフのコメントを通じて検証を行ったことを付記しておく。

5.2. 検証結果

実践した活動についても「①ワークショップ中の様子から見えた変化」と「②実施 1 か月後の日常生活への影響」に分けたうえで，「ⅰ 子どもたち一人ひとりの変化」「ⅱ 活動を通じた子ども同士の関わり合いや全体の変化」を活動記録からのエピソードの抽出を経て描出した「ストーリー」を通じて述べていく。

①ワークショップ中の様子から見えた変化

ⅰ 子どもたち一人ひとりの変化

～A さん（中学 1 年生・女子。10 回中 7 回参加）の場合～

ここでは，活動に参加した子どもたち 10 人のうち，最も大きな変化が認められた A さんについて，その様子を描く。活動開始前の A さんは以下のような様子であった。

〇表情が乏しい。
〇話しかけても声を出して返事が返ってくることがあまりない。
〇ゲームが好きで夜遅くまで起きており，朝が苦手。通常はフリースクールへの登校も午後からになることが多い。

（ストーリー）活動を通じたAさんの変化

Aさんは当初の無表情でほとんど声を発しない状況から，口元を手で隠しながらクスクスと笑う場面が頻繁に見られるようになり，活動の中では一緒にいる仲間に聞こえる程度の音量で声も出すようになった。

3回目の活動中，みなに見られている中で泣いてしまった（ファシリテーターの問いかけに答えられなかったのがきっかけ）ため，それ以降の活動に参加できるか関係者一同が心配したが，自分の意思で参加を続け，相手に声が届いていないときにはやり直してきちんと届けようとする様子，そしてそんな自分をファシリテーターに認めてほしいと思っている様子が見てとれた。この出来事が転機になったのか，活動外の日常生活でも笑顔を見せることが増え，鼻歌を歌うなど，スクールスタッフも驚くほどの変化が認められた。活動の後半，身体表現を伴う活動になってからも，動きは小さいながらしっかり参加し，チームでの活動でも役割を果たしていた。

ただし，1対1で向き合っても目が合わない状況は変わりなく，人の視線が気になるのか，ストレッチや呼吸などの活動には依然として抵抗があるようであった。

ⅱ 子ども同士の関わり合いや全体の変化

スクールスタッフを対象に行ったヒアリングによれば，活動開始前の子どもたちの様子は以下のとおりであった。
〇子どもたちは日常的に個人授業を受けている。
〇イベント等で他の子どもたちと関わりを持つ機会が作られており，毎日のようにトランプや人生ゲームなどで一緒に遊んでもいるが，互いの名前を知っているのか心もとない状態。
〇同じテーブルでお昼を食べていても，「個」の世界に入っている。スクールスタッフから話しかけられれば返事はするが，子ども同士の会話はほとんどない。

（ストーリー）活動を通じた子ども同士の関わり合いや全体の変化

一人ひとりが自分だけの世界に入り込んだように相互の関わりが薄い状態であったが，活動のなかで自然に仲間の名前を呼び，相手が困った状態にならないような気遣いや助け合いができるようになっていった。中学生の年齢では男女が関わることについて羞恥心が先に立つものであり活動の中でも男女が別々に動く様子が何度も見られたが，後半は男女間でも名前を呼び，

窮地に陥っていると思えば助け舟を出すような場面が見られるようになった。

また，2 回目の活動でファシリテーターがコントのような短い芝居を見せたときの反応は，「観る」のは楽しいけれど「やる」ことへの抵抗が大きいようであった。「やってみませんか」というファシリテーターの声掛けについては，スクールスタッフが「今後の活動を嫌がる子どもが出るかもしれない」と懸念したほどであったが，後半の活動で身体表現の要素を含む内容に入っても，楽しみながら活動を続け，チームでひとつの場面を創作するなど，「個」から集団の関わり合いができる関係へと変わっていった。

一方でストレッチや腹式呼吸など，身体活動を伴うワークについては，心身の硬さや人の視線を意識する様子が強く，この点はあまり変化が見られなかった。

②実施 1 か月後の日常生活への影響

ⅰ 子どもたち一人ひとりの変化

10回の活動が終了した約 1 か月後の平成30年12月25日，スクール内において 4 人のスクールスタッフへのヒアリングを行った。以下，ヒアリング内容の抜粋である。

・この年代の子どもたちがこういうワークショップに参加する場合，「だるいよな〜」みたいな感想が出るのが普通だろうと思っていたのだが，そんなコメントも一切なかった。ネガティブだろうがポジティブだろうが，何か話題に上ってくれるかなとも期待していたが，それはなかった。

・（A さんについて）いつもだと年末の終業式の本人コメントの際に，半泣き状態でやっと言葉が出る程度だったのに，今回は何のためらいもなくスッと「遅刻が多かったので来年はがんばりたい」と話をしてくれて，びっくりした。

ワークショップ活動中はさまざまな変化のきざしが見られたものの，1 か月後のヒアリングからは，それが日常生活にも及んだとは言い難いようであった。しかしながら，A さんの例は特筆に値する。ワークショップがどのように影響して A さんの変化がもたらされたのか，他の要因はないのか，証明することは困難であるが，スクールスタッフが「他に思い当たることはない」と述べていることから，ワークショップがなんらかの転機になったといってよいであろう。

ⅱ 子ども同士の関係性や教室の雰囲気の変化

1 か月後ヒアリングでは（ファシリテーターに対する好感を表明し「また会いたい」という子もいることについて）「大人は攻撃してこないと思っているので安心している。子ども同士の関係ではまだまだ」という発言がスクールスタッフから出されており，子ども同士の関係性や教室の雰囲気に変化があった，とはいえない。ワークショップ中には，さまざまな場面で仲間への気遣いや助け合いが見られ，「個」から集団での創作活動ができるまでに変化が見られたの

だが，ワークショップ中の特殊な状況のもとでのみ見られた現象だったと言わざるをえない。

6．おわりに～検証後の所感を含めて～

そもそも 2 か月足らずの期間で 1 回90分程度，10回の活動が人を大きく変えると期待することには無理がある。もっと長期にわたって継続してこそ，その成果が見えてくるものであろう。それでも今回の実践活動については，スクールスタッフ，主催者とも次年度の活動継続を望んでいる。今回のワークショップでは変化のきざしが見えながら日常にまでは及ばなかったものの，継続的な活動となればさらなる変化が見込めるのではないかという期待が関係者（大人）に持たれている。このこと自体をひとつの「成果」と見ることもできるかもしれない。

短期の活動で成果を可視化することの難しさを承知のうえで主催者が敢えて「成果検証」を依頼してきたのは，事業を継続するための資金や関係者の理解を得るためにそれが必要だからである。公立文化施設の社会包摂的取り組みとして試みられている本件は社会的要請を受けた活動でもあり，成果の可視化もまた，社会に求められることでもある。しかし，客観性を担保した科学的な成果検証をこの分野で行うことは困難を伴う。先行研究の例で述べたように，わかりやすい数値で表現する検証には留意すべき点もある。なにより活動現場に立ち会った者が目にした，子どもたちの硬い表情が照れ笑いのような笑顔に変わっていった様子，関わり合いの薄い状態から活動の休憩時間には中学校の休み時間のような子ども同士のじゃれ合いが見られるようになっていったこと，このような現象こそ，生きづらさを抱えているかもしれない対象者を社会的に包摂することにつながるのではないか。しかしながらその様子をその場にいなかった人たちに数値で伝えることは至難の業である。現場では温かな空気感を醸成しつつ，そこで起こったことを冷徹な評価に置き換える，その両面がまさにアートマネジメントに求められる現代的ニーズなのであろう。

また，近年特に盛んになりつつある演劇活動や演劇ワークショップに疑念を呈する声があることも忘れてはならない。

今回の活動でファシリテーターを務めた青年劇場の板倉哲は，演劇を「雨宿りでの『たき火』」と例える。凍えた体を温めて元気を取り戻す手助けになるかもしれないが，距離を間違えれば火傷をする可能性もある。セラピーの領域にその専門性を持たない者が乗り出すことはしてはならないとの戒めであると同時に，演劇活動やワークショップへの過度の期待感への警鐘でもある[14]。

---

[14] 日本演劇教育連盟編（2019）p 8 ～ 15 参照。

さらに演劇教育に造詣が深い中山夏織は，演劇ワークショップの目的として「コミュニケーション」や「表現」の力を身につけることを挙げる場合が多い昨今の状況に対し「教育が考えなくてはならないのは外へと向けられた手法だけなのでしょうか？むしろ教育の目的は，表現したい何か，コミュニケーションしたい何かを子どもたちのなかに育んでいくことなのではないか」[15]と指摘している。表面的な技法の習得に陥るのは芸術としての演劇の役割ではないというべきであろう。

ともあれ，今回の実践は，福岡という地域で生まれた，芸術文化を通じた社会包摂的な活動の萌芽である。課題を意識しつつ，今後も見守っていきたい。

参考文献・資料

中山夏織（2007）『Drama in Education ドラマ教育を探る12章』NPO法人シアタープランニングネットワーク

日本演劇教育連盟編（2019）『演劇と教育』2019 №707，晩成書房

日本劇団協議会（2016）「芸術団体における社会包摂活動の調査研究報告書」（文化庁委託事業）

日本劇団協議会（2017）「演劇による社会的包摂プロジェクト調査研究報告書」（文化庁委託事業）

OECD教育研究革新センター編著 篠原康正・篠原真子・袈裟晶訳（2016）『アートの教育学　革新型社会を拓く学びの技』明石書店

佐藤信編（2011）『演劇教育とワークショップ　学校という劇場から』論創社

[15] 中山夏織（2007）p34。